

幼稚園保育に於ける時局的反省の問題 (二)

— 講習筆記要領 —

倉 橋 惣 三

前號目次

- 一 時局對策としての保育事業
- 二 時局に保育の内面の反省
- 三 國民精神總動員の三標語
- 四 盡忠報國心の教育

五、國家心の實感

昨日は言葉に纏めてみますれば、幼稚園に於ける國家心の教育、或は國家感情をも申して宜いのでありませうか、是を國家心と云ふやうな言葉を使ひまして、それを幼児に養つて行く事が極めて大切である。而してその國家心を、

年長の子供に養ひますには自ら別の方法がありますが、幼児の場合に於きましては純觀念的に國と云ふ事を理解させる事は、將來としては勿論望ましい事ではありますが、幼児期の現在に於ては聊か難い事である。難いと云ふのみならず、さう云ふ判つたやうな判らぬやうな觀念の仕向けが無理にされました場合には、本當に内面的にしみるゝとした心持を養ふ上に却つて邪魔になるこゝもある。整つた形を與へて中味を後から造るゝ云ふ事はなかゝ難いのでありまして、是は譬へば宗教々育、藝術教育、道德教育、皆同様の事でありませう。大人に於ては立派な觀念的性質のものになつて、私達を支配し指導して居ります事も、幼児の場合に於きましては、其處を餘程上手にして行きませぬと、却つてやり損ひの元になるゝ云ふ事を考慮し警戒しなければならぬこゝがある。然らばさう云ふ風にしたならば幼児

らしく、即ち性情の教育を云ふ範圍内に於て國家心を養ふ
ここが出来らうか。昨日は斯う云ふ問題を考へたの
であります。その實際を致しましては、ほんの僅な事を申
上げたに止まりましたが、斯くの如く觀念で導く事が出来
なくて、性情そのものを促し起して行く云ふ事の爲には、
先づ第一に我々お互ひ幼児の傍に居ります者が、この國家
心を充分に目からも聲からも、その他皆様の勝れた人格的
香りの中から、この子供にうつらせて行くやうな、さう云
ふ行き方でなければならぬ。夏ならば汗の臭ひと一緒に行
つても宜いのであります。(笑聲)國家心を申しましたも、何
も高尚な澄ましたものではないのであります。働いて居
る中にもあるであります。然してその爲にはお互ひが觀
念でこの問題を教育して行く任務に當ります以前に、本當
に自分自身がさう云ふ國家心の所有者になつて行かなか
やあならぬ。斯う云ふ事を先づ考へました。是は言ふ迄も
なき事ではありますが、……言ふ迄もなき事ならば言はな
くとも宜いのであります。……言ひ代へれば常に誰も心がけ
て居り、外の事は貧弱でありまして、外の事は乏しくあ
りまして、國家心に於て貧弱であり乏しい云ふ事は自
ら許し難き事でありまして、然し是も始終この次から次へ
新鮮なる心持をして豊富にして行かなければならぬ事であ
りまして、この意味から幼児教育そのものゝ直接の教養を

しては、少し離れた事のやうに見へるかも知れませぬが、
今申述べて來ましたやうな必要上から、特に斯うした方面
の教養を絶へず我々は續けて行かなければならぬ。斯う云
ふ事を申述べました。

次に國家心を云ふ上から、國さ云ふものが地圖に示され
た場合、地圖に示されたあの廣さ、是も子供には判らせ難
い事であります。『大きいのよ、大變に大きいのよ、日本中
はこの幼稚園の何倍あるでせうか』或は先生も一寸勘定が
出來ないでせう(笑聲)。勘定出來ない言へばさう云ふ事
で濟んでしまひますが、その廣さを本當に認識させようこ
言つても判りませぬ。『日本の國は何年續いて居るのでせ
う。實に世界に比無き國なんですヨ。』と言つた處で、他の
比類ある方を知りませぬから判らない。或は國勢の色々の
大きな事に就きまして……輸出はさう、輸入はさう、何
處の國ささう云ふ商賣をして居るか、去年迄はこの港に何
處の國の荷は著かなかつたのに今年は何處の國の荷が入つ
て居る。是なごは愈々子供には分りませぬ。子供には國を
語る言つてもなかなか判らせ難いのであります。但し、
判らせ難いから言つて判らせずに置く積りか言申します
よ、そうではない。さうしても教育に於ては國さ云ふ事を
判らせなければならぬ。たゞ觀念的には難しいのでありま
すが、幸なる哉、我が國は國さ皇室が事實に於て、又私

達の心持の中に於て常にびたりき一つになつて居るのであります。従つて國を感じさせる爲に皇室を感じさせる。皇室を感じさせる爲に國を感じさせる云ふやうにそれが同一目的に向ひ得るのであります。其處で國家心云ふ言葉で現はして置きますが、日本帝國に於きましては國家心は皇室の御事を思ふ事に於てその内容が充分に遂げられるのであります。その皇室の御事となりまして、是は觀念ではない。畏れ多い事でありませんが事實であります。是は充分にあの小さい子供にも感じさせる事が出来ることであります。その皇室のお話に就きましては萬世一系、實に尊い申しましては幼児にはその意義を捕捉する事は出来ない。幼児の心の中へは到底はいり得ないあの悠久の長さによつて説いた處で……聽ては是非判つて貰はなければならぬ事でありまして……今は判らせ難いのであります。其處でさう云ふ周圍から説いて行くのでなくして、皇室に關する實際の御聖徳の有難さ尊さ云ふやうな處から話して行きたい。昨日は斯う云ふ事を申ししたのであります。

昨日は其處の處で終つて居りましたが、それにもう一つ附加へます。この御聖徳の事に就てであります。こゝは間違ひ無くお聴取り願ひたいのであります。皇室の爲に盡さなければならぬ、忠義をしなければならぬ云ふ事は充分教へたいのであります。傳へたいのであります。是は

昔から子供の教育に於て實に大事な問題であつたのであります。あの小さい子供に斯う云ふ事がさう判るであらうか。この問題を唯さういふ言葉で言ひさへすれば宜いと思つて言つて居る人はなんでもありませんが、本當に考へてみるに随分難しい事であります。日本人が皇室中心に忠義を盡す云ふやうな事は、是は決して單なる外國人が申しますやうな義務では無いのであります。英語で申しますオブリゲーション。餘儀なくさせられる云ふ味の附いて居りますあの義務では決してないのであります。然も未だ本當にそこの事の判りかねる子供には、そこのことがよく分らせ難い。たゞさう教へて置いて宜い云ふならば教育者は何ら専門的に苦勞致しませぬ。其處でその意味合ひから致しまして……こゝらが非常にこまかい處であります……皇室に對する義務「貴君は大きくなつたらば皇室に對して義務を持つのである」と云ふやうな説き方よりも、甚だ適當な言葉でないかも知りませぬが、皇室に對する親み、云ふやうな事を、斯ういふ言葉を用ゐて許して戴けるならば、皇室を心にちかぢか感じ奉るに申しては餘りに畏れ多い事ではありますが、唯、義務本分として遠く仰ぐだけでなく、自分にも少し感じられて來るちかぢか、有難さ嬉しさ、是をうんざつて置く必要があるのではないかと思ふ。宗教に於きましてさう云ふやうな事が考へられ

ますが、感謝云ふ、悦び云ふ、その感情に依つて結び附いて來ないものには本當に中から出て來るものは無いのであります。我が國の多くの道徳もその悦びの中から出て來る。まあ一般の事は兎に角致しまして、現に寔に有難い、上から親ませ給ふて戴いて居ります皇室。この皇室に對して寔に妙な言葉でありますが、子供の心を近よらせて頂かせてやりたいのであります。そのためには一つは御聖徳の事實を洩れ承りました限り子供に傳へて宜いと思ふのであります。『日本はネ、皇室が御本家でネ、それから色々家分れて居るのヨ』云ふ事は、勿論その通りですから傳へて宜いのであります。御本家たるこゝが判つてそれから有難い事が判る云ふ順は幼児には難しいのであります。

有難い事が先づ感じられてゐるこゝろへ、御本家云ふ觀念が然るべき時に與へられて來る。是が教育としての順序と思ふのであります。即ちその有難さ、臣民に對する皇室の有難さ、是を先づ充分に傳へたいと思ふのであります。

そうした爲の一つとして、明治天皇の御製の如きはよく拜誦してみなければならぬと思ひます。明治天皇の御製の中にはそのまゝ幼児に話して判る御製は澤山有ります。御歌さして勝れたものが澤山あるのは勿論、幼児の心持に直ぐに行くやうな御歌が澤山あるのであります。殊に最近に出ました或る書物の中には明治天皇の御詠みになりました

御歌のその前後の情勢を側近者として書き記して居る本がありまして、我々は如何に、御歌が御歌として出來たのでなくして、お心持をすらく、大和歌の素直な形でお現はしになつて居る事を愈々有り難く感じられます。斯う云ふ事は始終に、言はず水の涸れないやうに取入れて行きたいものと思ふのであります。幼児の場合には心持より外に與へる事が出來ないと思へば即ち、觀念では與へられないと思へば、お許しを戴いて心持の方から皇室を感じ、それを幼児に傳へて行くより無いのであります。恐らくさう云ふ氣持で皇室を幼児に傳へて居りましたもお咎めは無からうと思へられます。私達では無いが、幼児に免じてお咎めは無からうかと思ひますので、こゝらは本當に餘程考へたいこゝろと思ふのであります。

昨日も、この御上京の機會に必ず二重橋近くおいでになりました、それを持つて各幼稚園にお歸りを願へたらば、斯う申し上げましたのも、觀念丈けならそんな事をしなくとも判つて居る事でありますが、それが其處に或る氣持が湧きましたならば、それを持つてお歸へりになる事も出来るか云ふ、さう云ふ意味であつたのであります。

以上は昨日のお話を少し中に入つて追加しました點であります。その次の考へまして、その觀念的なるものも、現在極く近くに事實として表現されて居りますものが

ありますならば、それは観念的性質を持つて居るものでありまして、それが幼児を取圍んで居ります生活事實の中に織込まれて居ります限りに於て、是を子供に持つて行く事は必ずしも難くはないことがあります。是を具體的に申しますならば、今あの戦ひに征く人々。或は國の爲に戦つて陛下萬歳を叫んで死なれた勇士の話。あのトーチカの周圍で、或はクリークを渡つて、食事をしないこと幾日、炎天下に焼けて戦つて居る云ふ事が今行はれて居る。然も是が歴史上に遺された記憶ではなく、又、誰かゞさう云ふ事を一つの思想の形にまで纏め上げた説話でもなく、現在の事實として澤山にあるのであります、その色々な事實話、ニュースの中に出ますもの、或は色々發表されますもの、實に日本のものであるものである事を我々が感じられた時に、それを幼児に話す事、持つて行く事、是は今こそ出来る事だと言ひ得るかと思ひます。

かうしたお話、幼稚園話云ふものは所謂浮世離れたこと申しますか、狐や狸や、浮世離れたあの空想話の多い中に、斯うした事實話は特有の力をもちます。但しあの戦で死ぬ人は事實で死んで居る云ふよりも、事實を通り越して感激で死んで居るのであります。そこに事實の感激性がある。インスピレーション云ふものがある。……然もその事實は單なる平盤的事實の話ではなく、感激で戦つて、

感激で叫んで、感激で斃れて居るのです。その事實話云ふものは、幼児に持つて來るに最も適當な話である。然もそれが昔そういふことがあつた云ふ話ではない。又西洋にさう云ふ話が有つた云ふのではない。今の話として、話す人が眞に實感を持つてば血の匂ひを浮ばせる事の出来る程に生々しい話であつて、さう云ふ話の材料は今日充分にあるのであります。是は皆さんが既に御實行になつて居ると思ひます。今日の武勇美談申しますか、戦地の壯烈なるお話申しますか、さう云ふ事を然るべくお傳へになつて居ると思ふのであります。是は今日出来る事でありまして、若し是が時間的に經過した事であつたならば、觀念として残らない。けれ共、今事實でありますから、國の爲に死んだのヨ、云ふことが幼児にも實感になる。今生々しく實感せられる事實であります。そこで、何んの爲に死んだのでありませうか、子供に尋ねる。勳章の爲でありませうか、名譽の爲でありませうか、いゝえ、國の爲……そこが幼児には分りにくい。一番分らせたは『國のため』そこが判らない。然も今日の時局は不斷出来なかつた場面を容易ならしむる云ふバックになつて居る。この條件に依つて、一寸難しげなあの觀念性で行かないでもそれを子供に傳へて行く事が出来る今日であります。

一體、私は何時も申上げるのであります、感激を感激

で傳へて置き乍ら、折角良いお話をして置き乍ら、その終りに、是を要するに是何の意味である。云ふやうな話の仕方は、話さして最も愚劣な行き方だと思ふ。氣の抜けた話に限つて。終ひを是を要するに……で結ぶ。(笑聲) サイダーを飲んでしまつた時に、寔にサイダーを有難ふございませぬ。飲んで居る最中は味も無ければ、サイダー獨特のしゆつこする音も無い、其處ではは昨日口を開けて、云ふ。斯う云ふ氣の抜けた人は始めにお終ひを觀念で結ぶ。其の點を今取扱つて居るこゝへ持つて來てみますならば、今私は國家に對する忠節の話をする。今日の話は空想な話では無い。アンデルゼンの餡の腐つたやうな話では無い。國家に對する忠節の話。——幼兒達もちやんとして居る。それから先生がすうつこ話をする。流石に氣の抜けたサイダーと異つて今の生々しい戦場の話でありますから聽いてゐる。さうして是で止めて置けば宜いのでありますが、『判つたか國の爲、是が忠節云ふものである。話は忘れても宜い、忠節云ふ言葉は覺へて置きなさい。』斯う云ふ行き方をしてはいけない。言葉じやない。觀念じやない。今こそ與へられる昭和十三年のこの事實であるのでありますから、それをそのまゝやつて行けば宜いのであります。さう云ふ教材申しますか、それを充分にお用ひ願ひたい。或は既にお用ひになつていらつしやると思ひますが、その

時に保育實際の注意が一寸要るかと思ひます。その注意の一つとして、今私達が狙つて居ります處は、國家云ひ忠節云ふだけでなく、その刹那に起るあの實際の感じを言はうとして居るのであります。その感じの處をきりつこ話に持つて行く事が必要であります。何も事變を事實として語るではありません。幼兒にこの事變そのものを理解させて置く云ふ事はさう必要でも無いと思ふし、又難しいのであります。青年教育の場合にはこの時局性に於て理解させる事が必要であります。其處が彼等に分る處でありませう。然し幼兒の場合には時局を教へ語ることは難い。時局保育だ云つて毎日三十分づゝ時局に就て話をする。斯う云ふ事は、なまつてはいかぬと反對するのでもありませんが、國家心の華と咲いて華と散る、其處をしつかり傳へたいのであります。それですから前後の餘り詳しい話は致しませぬ。『今日もお話するが、豫め一體何んの爲に戦ひをして居るのでせう。』こんな話は要りませぬ。又地圖を擴げて戦局地理を教へないでも宜しい。ドンドンボンボンと劇的に氣分を出して來る。さうしてその場面が何處であらうと、そんな地理的な事は幼兒にはさうでも宜いのであります。中學校や女學校ならば日本軍が斯う行つて斯う行つたか教へられますが、幼兒にはそれが出來ませぬ。『歐羅巴の大戦争より戦線がすつこ廣い』と云つて感心させようとし

ても何んにもなりません。そんな事はどうでも宜いのです。『暑いのは、暑いのは、ぢりぢり日が照つて居るの』そんな處から話して行けば宜いのであります。(笑聲)さうして實感を出す爲にしゃがんで居る。頭の上へ彈丸が飛んで來るでせう。向ふをやつツける迄は死んではならぬから頭を下げて居るのです。『子供をしゃがまして、先生と一緒に這はしても宜い、さうして、うわアーと言はしても宜い。(笑聲)その實感を出して、ドンドン、バタツ前の人が倒れる。『天皇陛下萬歲。』陛下萬歲。その陛下萬歲。云ふ氣持がこつちに乗移つて來なければ駄目ですよ。陛下萬歲。』血がばツミ飛ぶ。其處まで思ひ詰つて來たらこの邊から實感がきらツミ出ませう。

茲で皆さんの話し方の技術が發揮出來ますよ。即ちその戦ひの話を意義づける爲に、『此處を落して斯う進んで行く、此處を落さなければならぬ、此處は戦略上極めて重要な所である。』幼児參謀本部のやうな難しい事を言つてもいけません。(笑聲)事變に力を付ける爲に言つたのでありませうが、必要はありません。

それから次の注意として、戦争の悲惨さを語る事もさう要らぬ事と思ふのであります。心を語れば宜いので、所謂戦争描寫をするのでは無い。戦争そのものを傳へようとするのでは無い。ですから前に倒れた人からしゅツミ血が

出た。そんな話是要らぬ。悲惨さ見へるのは傍觀者だけに見へる事で、戦つて居る者には悲惨でも何んでもありません。兎に角戦争の實況は餘り語らぬ方が宜い。『どうもこの頃、家の子供は、幼稚園の夏の講習以來、時局の話をする。それも結構だが、家に歸へつて來ても眼の色が變つて居る。寝る時には鐵兜を枕頭に置いて、夜半に目を覺まして、血が出た血が出た騒ぐ』さう云ふやうな戦争話で神經を刺戟するやうな事は餘りやりたくない。

この秋は政府で展覽會を開きますが、その展覽會の繪はお姫様が、若殿様と櫻の下で朧月夜を眺めて居る云ふやうなもの餘り出さないで、(笑聲)時局性のあるものが多い事になるでせう。戦争畫、是は昔から澤山有るのであります。この戦争畫には二種ありまして、戦争そのものを描寫して居るものと、戦争の中に戦つて居る精神を現はした畫と二種あるのであります。あの日露戦争後、ルビンスタインの戦争畫は歐羅巴を震撼させた戦争畫であります。それは忠勇なる戦ひと云ふよりも戦争そのものゝ慘劇を感じさせてしまふ。『西部戦線異状なし』あの映畫を御覽になつたでせうが、あの映畫を觀て戦争の慘劇を感じさせられてしまふ。少くも幼兒にはいづれもいけません。こゝらの事が大事な注意かと思ふのであります。

其次に注意致したい事は、本學期のお話の材料は絶へず

それである云ふ事になります。幼兒には少しきつ過ぎます。幼兒が朝風に吹かれて秋の空の晴れて居るのを見て参りましたら、今の幼兒に相應しい和かな幼稚園らしい話をしてやりませう。さうして時々この話をする。こゝらが皆さんと私達友人同志の御相談であります。唯さう云ふ話を成るべく多く、然し餘り多からず適度に、と言つても判りませぬが、やたらに多くてもいけない。そこらが實際問題でありまして、適當に、一週に幾度云ふ事を私は決定出来ませぬが、時々お話する。斯う云ふ事にしたがいと思ふのであります。

六 幼稚園に於ける個人主義傾向の注意

一番初めに申上げましたやうに、この時局に於てお互ひの仕事を反省致しますその標準として、この時局を代表されて居りまする、三つの標語、即ち盡忠報國、舉國一致、堅忍持久、斯う云ふ三つの點から反省してみよう云ふ約束で話を初めました。之れから、第二の舉國一致、この問題を以て反省してみる時にさう云ふ事が心付き、又考へられ来るか云ふ問題に入りたいのであります。

處で前からのお話に既に含まれて居りますやうな具合

に、觀念的意味に於て舉國一致云ふやうな事を幼兒に直接教育する事は難しいのであります。皆さん、舉國一致しなければいけません。『何んの事が判らぬ。其處で是を幼稚園の今の生活に持つて來て考へてみました時に、二つの問題になると思ひます。その一つは將來舉國一致云ふやうな生活の充分出來て来るやうに、その方へ幼兒を向けて置かうとする事でありませぬ。將來舉國一致云ふ形に於て大成する、その本の傾き、傾向を養ひ得たならば云ふのが一つであります。

もう一つは、同じ事を裏から考へまして、舉國一致云ふ事に向ふ本を養ふ云ふ事も相當難しい事でありませぬ。せめて、その反對に成長して行くやうな要素、舉國一致云ふ事の反對になるでもあらうやうな生活要素を除いて置きたい。斯う云ふ事になります。

幼兒はこれから色々の良き教育を受け、良き社會體験を踏み、自分の社會に於ける自覺を進めますと共に、舉國一致に向つて反省して行くであります。少くも舉國一致せざるべからざる事を外からも必要とし、中からも欲望として強く持つやうになります。その時に必要は感ずるし、その慾望は持つけれ共、自分の性格そのものゝ中にそれを邪魔する、それに差障りになつて行くやうなものが有つたならば大いに是は困るであります。而してこの邪魔にな

るもの、差障りになるもの、自分をして真に舉國一致人になり兼ねさせるもの、思へば是は幼稚園時代に斯う養はれてしまつたのだ云ふ事になりましたら大變な事でありませぬ。然もこの舉國一致云ふ事と反對の方向に行きます個人主義的傾向云ふものは、人間一生の中で、先づ幼児期に於てその癖をつけ易い問題なのであります。問題を其處へ引つくるめて、暫く舉國一致云ふ事から離れて、今日お互ひのやつて居ります幼稚園保育の中で知らず識らず個人主義的傾向を助長するかも知れないやうな傾きのものがありはしないだらうか、あつたら是を訂正しなければならぬのであります。それとほんの裏表の關係で、一寸意の用ひ方で、舉國一致云ふ大きな事ではありますけれど、みんな一致する云ふやうな、そつちへ向くであらう事の、心の芽のやうなものでも養ひ得るものが幼稚園の中にあるとすれば、是は大いにその意義を發揮し、我々はそれを利用しなければならぬ云ふ、斯う云ふ實際問題になります。幼兒がその性情を養はれます家庭、この家庭は一種微妙な世界でありまして、彼處には家族多勢寄つて居ります。その中で個人主義も利他主義も區別のつかない、或は其處まで分化しない人間感情がふつくら養はれて居るのが家庭であります。家庭では子供は相當我儘を言つて居ります。親は我儘を許します。其處に相當個人主義的傾きが

出るやうであります。家庭の中に於て親と自分の關係、兄弟と自分の關係、その事自體がしつかり、真に家庭らしき關係に於て存在致して居りますならば、その方が大きな事實でありますから、その中行はれる我儘の方は、寧ろ家庭團結、家庭的の一致を強める位のものであります。それで個人主義的性が養はれる云ふ事は必ずしもありません。家中からほい／＼養はれました子供は、一面我儘にもなりますけれど、よく家庭生活自體を味ひました結果、本當の性情の根本に於ては人と共に居る事の悦びを充分體驗して育つのであります。即ち非個人主義の性格になるのであります。

人の爲に盡す、兄弟互ひに遠慮を續け合ひ、子は親の爲に色々盡す人ふやうな事を、真に自分の中から出て來る成年期で無い幼年期から、餘り強ひられませぬ、却つて妙に個人主義を養はれたり致します。水臭ひ家族の關係の中に道義的に行はれて参ります秩序關係云ふものは、決して本當の和合の生活を性格的に養ふものではない。『さうもお宅様のお子さんは、何んも個人主義で無い事でせう。お饅頭を一つ貰ふ云ふ、ちやんも兄弟の年に依つて配分し、自分はその年齢の部分だけを食べていらつしやる。實にあゝ育てれば個人主義にはなりません』と言ひますが、それは必ずしもさうでありませぬ。兄弟が一つになつ

て居る感じが其處では却つて抜けて居るかも知れないのであります。それで年齢に相當する配分なんて云ふ事は個人を個人として分けて居る丈けの話でありまして、非常に合理的に個人が一緒に暮して居る丈けで、個人が和合融和して居るのとは違ひます。寧ろ一つのお饅頭を年の差も無くすうツミ食べてしまふ。きちん切るのは面倒臭いから宜い加減の處から切つて食べてしまふ。僕の方はもう少し有つたらうと、事を面倒にする場合もありますが、兄弟仲が良かつたら：：自分の食べる分が無くなるのは残念ですからごん／＼自己の權利を主張して食ひます共：：それが多からうと少からうと、そんな事は問題では無い。共に食つたご云ふ、それが楽しいのであります。庖丁できちん切ると何んだか兄弟の中も庖丁で切られたやうな氣がする。寧ろ一つの饅頭が色々の恰好に切られてもそれ／＼兄弟が食へ合ふ處に饅頭主義家庭生活が行はれるのであります。(笑聲)時に依りますと「いゝだらう、兄いちやん、いゝだらう、僕食べたいから兄いちやんの分も食べてしまふよ」兄弟が占領する。傍で見て居ると非常に個人主義の弟のやうであります。兄は「せめて一寸舐めさせろ」なんて言ひます。其處に言ふに言へないものがある。(笑聲)だから家庭の中では個人主義とか和合主義と云ふ事を超越した、ぼやツミしたものがあるのであります。さうした子供達が幼

稚園に出て來るのであります。初めて浮世の風に晒されるご申しますか、兎に角人の世に出る。先生から皆仲良くして言はれても、さう云ふ譯で兄弟でも無いのに皆この幼稚園に來たのだらう。子共は判つたやうな判らぬやうな、嬉しいやうな心配のやうな、あの野郎と一緒になる爲に來たのではないと思つて居るかも知れない。(笑聲)先生は人間社會理想主義を掲げて「本園の幼児たる者は兄弟であります」ご申しますが、正直の處他人で、本當の兄弟は太郎兄いちやんです。(笑聲)さうしてそれで先生は個人主義が排撃出來たものと思ひますが、私は寧ろそんな不自然な事をするご却つて個人主義が中から出て來ると思ふ。私は幼稚園ご云ふものは寄合所帯ですから色々餘所から寄つて來て、これから一日一日、一ト月一ト月、重ね來る生活體驗の經驗が經驗せられるのである。經驗が經驗せられるのであります。その經驗せられる間には喧嘩もする。喧嘩したお蔭で人間關係に就て考へられる。今日の喧嘩を思ひ返して思索に耽けるご云ふ事もありませんでせうが、(笑聲)喧嘩して初めて人間の關係が判る。兎に角ご自分ご行違つて居たものがあつて、こゝでやアやアごやる。其處に人間關係の強烈なる意識を引起して來ます。或は誰かご怪我を一寸致します。今迄口をきいた事は無いけれ共、その子が「痛いから傍に居て頂戴」ご云ふので何んだかもチもチして

『さうかい、痛いかい』なんて言つて、そつち向くのは氣ま
りが悪くて反對の方を向いてぢいッミ番をして居る。先生
が来るミこの人、怪我しやアがつた』と言つてうしろ向い
て居る。先生は理想主義ですから『こつちを向いて、お互ひ
に助け合はなければいけません』云ふのですが、子供はそ
んな處ではない(笑聲續く)さう云ふ理想主義が直ぐに現は
れて來ない、經驗が經驗されて來る。その經驗されて來る
中にこちらの指導の仕方では非個人主義になり、或は個人主
義になる事が屢々出て來るのであります。

『みんな一致』、圓滿に輪を作つて、さうして先生がハー
モニを弾く。』云ふので個人主義のやうなキイの音が
こーンミ鳴るのであります。(笑聲)輪は圓滿、音楽はハー
モニ、楽しいのネ』なアに楽しくも何でも有りアしない。
(笑聲)斯う云ふ理想主義でやらう』言つても駄目です。

其處で我々の狙つて居ります處は、子供達に人ミ一緒に
居る事の悦びをうんミ養ひたい。幼稚園の教育價値を説く
人が今日でも斯う申します。幼稚園に來て子供は社會的訓
練を受ける』と言ひます。訓練ミ云ふ意味が、若し社會生活
の悦びを訓練させるミ云ふ事でしたら私の考ミ一致して居
る。社會生活の義務性を訓練させるミ云ふのでは、私の考
ミ非常に異つて居る。共に居る事の悦び、共にする事の悦
び、是を考へたいのであります。

舉國一致ミは二つの問題を含みます。國を擧げて一つの
方向へ進むミ云ふ事が舉國一致の一つの點であります。國
を擧げて目指す處が一つであります。あゝ悠久の大行進、
國を擧げて一つの方向に行くのであります。私はこつちへ
行く、お前はあつちへ行け、ばら／＼では無い、是が舉國
一致ミ云ふ事に於て極めて大事で有る事は云ふ迄も無い。
恐らく今日この時局に即して要求されて居ります舉國一致
の意味は其處が主であらうと思ひます。しかも舉國一致ミ
云ふ事のもう一つの大事な意味は、一つの方向に行くミ云
ふ動きの意味の外に、この互ひの間が密着して居る。互ひ
の間が粘着して居るミ云ふ。互ひの間が和して居るミ云ふ
この點であります。ここによつたらば、ここによつたらば
でありますよ、ここによつたらば、一つ方向に進んで行く
一隊は髓に皆一つ方向に一致して居りますが、その中で或
は争ひ競つて居るかも知れません。私はさう云ふ行列を屢
々見ます。一つ方向には進んで居るが、その互ひの間はく
つついて居ないのであります。是では方向が一致して居る
ミ云ふ事丈であります。然し乍ら本當の舉國一致は方向
が一つである事の外に、皆が和して居るミ云ふ事ではなけれ
ばならぬミ云ふ點、これこそが幼稚園で養ひ得られる點であ
ります。皆今日國民の赴く處の方向を知つて居ります。子
供は、こつち、あつち、こつちは壁だ、ミ色々云ふでせう。

〔笑聲〕日本國民の行方、是は判らぬ。だけれ共、『みんながそつちへ行くなら行きたいね、私一人別に行くのはいやだ』云ふ和合の心丈けは幼稚園で養はれる。其處で、私は茲に於て皆さんの御反省を願ふ。詳しく申上げる迄も無い、御反省を願へば宜いと思ひます。

幼稚園の中で迄、極めて舊式なる競争心に訴へる教育が行はれて居りませぬか。人を競争させて、それでこつちの思ふやうな事を實現して行かう云ふのは競馬であります。馬の社會でも出来る事であります。然も永い間それが人間の教育に於て行はれて來たのであります。今日相和する事を本體とする教育の中で、或はまだその原始的なる、粗野なる、淺薄なる競争的激勵法が用ひて居られはしないだらうか。部屋を共にして居る子供達の中に於て、誰さんに負けない爲に斯うしろ云ふ事がよくぬけく言へるものだと思ひます。やつた事に於て同じではありませぬから或る者が勝れます。その勝れたる者も悦び、負けたる者も共に悦ぶ、『宜かつたねエ、君、うまく出來たねエ、』是は宜しいのであります。誰かど一等賞にゴールインしました、宜かつたねエ、なぜ君の勝つた事を悦ぶかと言へば僕も先着したかつた、僕も先着したかつたのを君が先着したから悦ぶ、『まアさう云ふ譯であります。それは當然であります。するに勝つた方は面映氣に『君が駆けて來る事に

氣が付かないで、ベストを盡した、そのベストの中に差が有つて僕が勝つた、勝つて濟まぬネ、君を負かす心算では無かつたが勝つてしまつた。これが畢り君の負けた事になるのだネ。今度はベストを盡せば君の方が勝つかも知れない』それを先生が聽いて居て『みんなが一緒にゴールに入ればこんな嬉しい事は無い』そんな理想主義を言つてはいけません、『そんなにみんなが一緒に入つては賞品が足りぬ』〔笑聲〕そんな現實主義に走つてもいいけません。運動會云ふものは競争性を多分に含んで居ります爲に動物的活力、アニマリステイックバイタリティーでやつて居るのでありますから、勝たうとして騎虎の勢ひで迄行かなくとも、犬猫の勢ひ、けんやんの勢ひになつてしまふ。〔笑聲〕あんた、うまく勝ちなさい。是は職業選手です。實に下劣であります。藝術品等も競争心で激勵して、『うまく書けた者には是をやる』言つたやうな行き方は實に下等だと思ふ。斯う申しますと、『それでは勵みがつきませぬ、先生こそ理想主義な事を言つて居る』とお責めになるかも知れませぬが、其處が苦心ですネ、其處が苦心なんです。書いたものが皆同じで、うまきはうまきにしてよけれ、まづきはまづきにしてよけれ、それでは終ひには子供は書く氣が無くなりますが、其處に微妙なる苦心が要るのであります。少くも初めから競争心に訴へて行くやり方は個人

主義養成の搖籃をなすものだと思ひます。

話をぐツミ別な方へ持つて参ります。幼稚園ではそんなに揃はないでも宜いミ云ふ事を申しましたが、舉國一致の玉子であります。舉國一致の雛型であります。始終一緒になければならぬ。遊戯室で遊戯をする、一緒にピアノに合はせて、左の脚を上げる、斯うやつて左の脚を上げる。誰か右の脚を上げる。舉國一致が亂れた、其處までやかましく言はなくとも宜いミ私は言つて居りますが、(笑聲)それに就て斯う云ふ問題が有る。何も揃はなくとも宜い、遊戯の本質の中に揃ふミ云ふ事丈けが重大な事では無いのでありますが、揃つて居ない事に氣が付いて居ないで平氣でやつて居るやうな心持には一寸問題があります。レビューの、あの少女達が揃へるやうにすう／＼揃へる、そんな事はさうでもよろしいが、自分ひまり違つて居ても平氣で居るミ云ふのはさうかして居るのです。『遊戯だから揃はなければならぬ』は申しませぬが、貴君のテンポが遅い爲にみんなの樂しさが崩れる『ミ云ふ其處の感じは養ひたい。あの藝人が踊つて居る時にも屢々さう云ふ事を見受けますが、自分は抜けてしまひたいが、矢張り、にこツミする處はにこツミして、くるツミ廻る處はくるツミ廻つてやつて居る。その氣持の中には、お客様に濟まぬからやつて居る』云ふ藝術表現さしての責任感もありませうが、私が抜

けたら一緒に演つて居るこの一致的快感が崩れるのであらうミ云ふ處から抜けられないのです。その氣持は私は幼稚園で養ひたい。或る唱歌を唄つて居る時に一人の子が調子外れで、我れこゝに在りミ云ふやうな聲で、うわアミやつて居る。それが別に音樂として良いミか悪いミか云ふのでは無いけれ共、みんな違つて自分ひまり皆ミ別で平氣だミ云ふやうな心の養ひ方は非常に考慮して行くべきであります。殊に皆が唄つて居るのに唄はないで平氣で居るのは最も變であります。私のつまらぬ作品を皆さんで唄つて下さるミ云ふので、昨日遊戯の時間を拜聴致して居りましたが、皆さんが立つて唄つていらつしやる時に、腰をかけた唄つていらつしやる方がありました。お疲れだらうミお察して居りましたが、よく皆ミ步調が合はなくて平氣でいらつしやるなアミ思ひました。皆さんがお腰をおろす時はすうツミ揃つておろされましたが、是もお疲れになつて居るので腰をおろすのがお揃ひになつたのだと思ひました。(笑聲)道徳的に揃つたのでは無かつたかと思はれました。そんな問題は茲では論じませぬが、性格それ自身の傾きの中に、さうした人との關係の和合一致、さう云ふデリケートの感じを養ふ事は非常に必要だと思ふ。殊に幼稚園で競争心に訴へて行く場面には、随分反省の餘地が有ると思ふ。人ミ一緒に居る事の樂しさを在園數年の間に味はずして出て行つてしまふ者が相當あるのじやないでせうか。